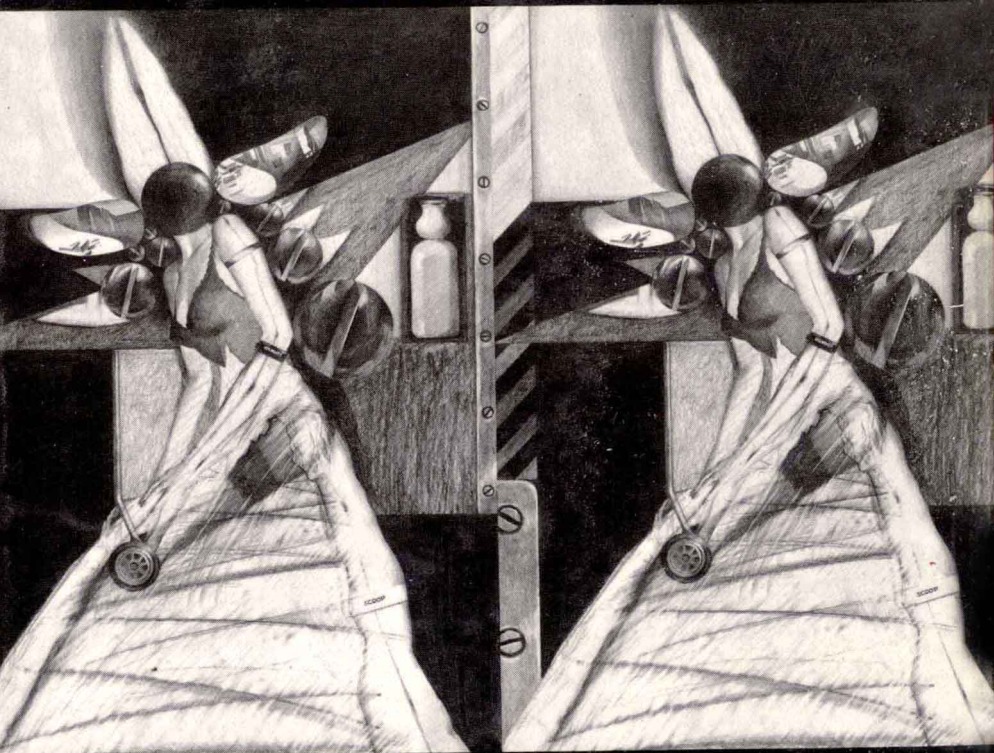


イカルガの祭り

斎藤 憐



而立書房

斎藤 麟（さいとう れん）

1940年 朝鮮平壤で生まれる

1962年 早稲田大学露文科中退

1965年 俳優座養成所卒業

同年『自由劇場』結成に参加

1971年 「演劇センター68」結成に参加

1971年 「演劇センター68」を離れる

1980年 第24回岸田戯曲賞受賞

イカルガの祭り

1983年1月25日 第1刷発行

定 価 1000円

著 者 斎藤麟

発行者 宮永捷

発行所 有限会社而立書房

東京都千代田区神田神保町1丁目20番地

振替・東京9-174567/電話 03(291)5589

印 刷 科学図書印刷株式会社

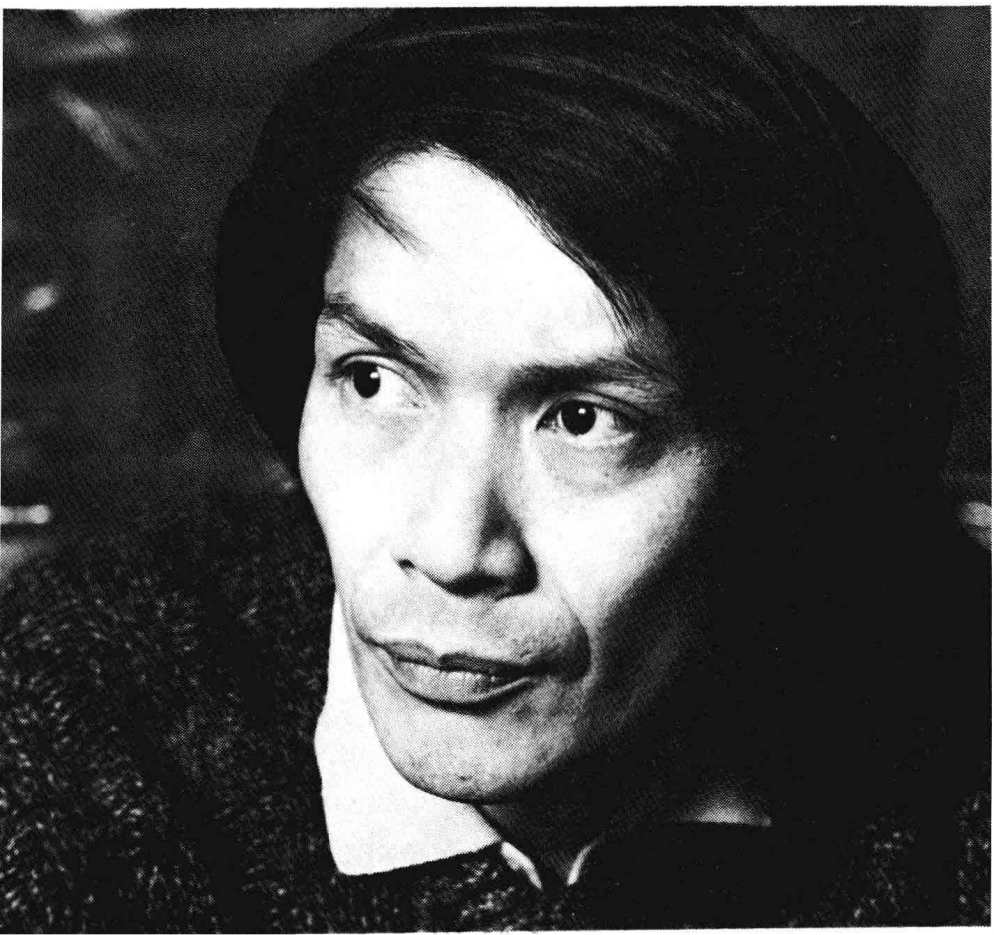
製 本 大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。0074-0553-3359

©Ren Saito, 1983, Printed in Tokyo

イカルガの祭り

斎 藤 憐



装幀・岡原洋二／写真提供・週刊読書人

登場人物

カツラギ王子
 タカラベ（その母）
 オオアマ（その弟）
 ハシヒト（その妹）
 フルヒト（その従弟）
 オオトモ（その息子）
 カル（その叔父）
 アリマ（カルの子）
 オタラ（カルの妻）
 ヤマシロの王子
 ホミ（ヤマシロの妻）
 クラツクリ
 アカエ（クラツクリの従弟）
 ヒムカ（アカエの弟）
 オオチ（アカエの娘）

コゴシ
 ミワ（ヤマシロの部下）
 コマ（アカエの部下）
 シラギ
 ヨシ
 舍人
 1
 2
 3
 4
 5
 1
 2
 3
 4
 5
 采女
 1
 2
 3
 4
 カマコ

第一幕

1

山に囲まれたタカラベ大王の宮殿。それまで茅葺きであつた宮殿を板葺きに改めたことからイタブキの宮と呼ばれたという。

王室へ続く長い階段。玉座に坐っているタカラベの女王の頭からオオチが儀式用の王冠をとり、日常用の金冠にかえる。それから女王は長い階段を上っていった。

尊い方々がおわす処の下に、出入口に続く回廊があつた。アカエとヒムカの兄弟がじつとしていた。

ヒムカ　いつまで待てばいいのだ。兄上、待つことばかりに明け暮れているうちに、俺に与えられた、
さして長くない人生が終わってしまう。

アカエ　ヒムカ、わしだって何も考えてないわけではない。もちろんこのままでよいとも思っていない。だが今それを言うな。

鈴の音が聞える。

アカエ　大王のところからクラツクリが帰ってくる。いいかヒムカ。いとこのクラツクリにわれらの

胸の内を氣どられてはならぬぞ。

長い階段をクラツクリが降りて来る。アカエとヒムカは、頭をたれて待つ。

アカエ お勤め、御苦労でございます。

クラツクリ うん、大王はいつになく御機嫌うるわしくあらせられ、われらが願ひすべて聞きとどけてくださった。アカエ、アマカスの丘にわれらが城を築くことになるぞ。

アカエ アマカスの丘に城をお建てになる。

クラツクリ アカエ、なにか不満でもあるのか。

アカエ いえいえ。クラツクリ殿が、われらハヤ一族のためになさること。私どもに何の不満もございませんぬ。

クラツクリ そうか。……実はお前たち兄弟に相談したいことがあってな。（あたりを見まわして）うむ、ここではまずい。

と去る。

柱のかけにうずくまるようにしていたカマコがあたりを見まわし出てくる。

カマコ ふきすさんだ嵐の季節はどこへ行ってしまった。無慈悲な風は百年生きつづけた大木をなぎ

倒し、ふりしきる雨は人の世の塵、芥、汚物たちを海へと洗い流した。あの日々、山はくずれ高きものは泥沼の底へと落ち、時の流れをうまく渡った名もなき勇者たちが天下を握った。あの日、すべての者が王になりえ、すべてのことがありえた。だがその後には蛆虫どもの平和がやってきた。ハヤのクラツクリの一族がすべての力をわが物となした。国の政はクラツクリが決め、諸侯をとりたてるのもクラツクリの意のまま、人々は自分がハヤ一族の者として生まれなかったことですべてをあきらめ、クラツクリに媚びへつらっている。俺の罪といえば、この世に生まれるのが遅すぎたことだ。この俺が母の乳房にくらいいついている頃、焼き払われた都に人々は帰りつき家を建てた。俺が馬に乗れるようになる頃、互いに戦った者たちは、和議を結び、俺がこの手に剣を持てる歳になった時、この国には剣は無用のものとなった。泥のような平和、鋼のような秩序の中でいったい何ができる。ハヤ一族のように家柄にもめぐまれず、ハヤ一族のように多くの豪族の助けもなく、ハヤ一族のように大王をあやつることができない俺に何ができる。まず王族の中に手を組む者を見つけ出さねばなるまい。（見て）女王の實の弟がやって来る。あの男の血すじと俺の知恵でハヤ一族と女王の力と闘うことができるか。

もう若くはないカル王子やつてくる。カマコ卑屈にもみ手しながら近づく。

カマコ これはこれはカルノミヤさま、本日ははるばる半島より使者がまいったとか。

カル ああカマコと言ったな。お役目御苦労だな。

カル行きかける。

カマコ お待ちください。先日のお話の件、まだお返事いただいております。

カル え……（あたりを見まわして）おうおう、そうそう。うん、つまりこう、世の流れというものがあつてのう。わかるかな。

カマコ 世の流れですか。するとハヤのクラツクリが王がもちいる紫の冠を勝手にいただいたのも世の流れ、大王であらせられる殿の姉君を自在に操っているのも世の流れ。そういうわけですな。カル もういい、わしはお前などと話をしているひまは持たぬ。

カル去りかける。

カマコ（急に笑った）私としたことが人を見る目もなかったのか。

カル立ち止まる。

カマコ 私はカル様こそ、ハヤ一族に反感を持つ豪族たちの力を一つにし、やがてはこの国の大王になられるお方と思っておりました。

カマコ行きかける。

カル わしがこの国の大王だと。

カマコ ほかにどなたが大王になります。あなたはこのままで終わってしまわれるお方ではない。あなたこそこの国の新たな時代を造る王となられるお方。いやこの国は未来の偉大な王を失うことになった。

カル カマコ。わしが王になるべき者だとどうして言えるのだ。いや待て誰か来る。うん折を見て、わしの邸へたずねてまいれ。

カマコ はあ、カル様のお邸へ。それはまた、この身にはすぎた光榮。それではまた後日。

カマコ 深々と頭をさげる。カル、ソワソワ立ち去る。

カマコ (頭をあげ) ふん臆病者め。王冠は手に入れたいが、謀叛を起こすのは恐い。だからといって周到な計略を立てる知恵は持ち合わせぬ。おや、知恵の力で王権をしのぐ力を手に入れた奴がやってくる。

柱の陰に隠れた。

フルヒト　ボクはもう待てないよクラツクリ。

クラツクリ　お腹がおすきになりましたか、フルヒトの王子。

フルヒト　そうじゃないよ、王冠だよ待てないのは。ボクの父さんは二十歳で大王になったのに、ボクはもう二十八だよ。父さんが死んだ時、今度はボクが王さまになれると思ったらあの女が大王になっちまった。

クラツクリ　王子様、大王は先帝のお后さまでございますよ。

フルヒト　でもさ、ボクの母さんはあんなたちの兄弟だ。だから一年待てばボクを王様にするといっただじゃないか。あれからもう二年になるぞ。これ以上待っていたらボクはおじいさんになっちゃう。

クラツクリ　フルヒトの王子。今は季節が悪うございます。あなたが今、大王になれますのは、二月に稲が芽を出すようなもの、せっかく芽を出してもこごえてしまいます。

フルヒト　こごえる？、今はもう五月。いい季節じゃないか。

クラツクリ　殿下、季節というのは、もののたとえでございます。

フルヒト　たとえて申すなら、ボクはさしずめしゃくやくの花、五月にぱっと咲いてどうしていけない。

クラツクリ　それはその、しゃくやくの花の隣に大輪の牡丹の花が咲いておるからでございます。残念なことに、今は牡丹に人は心を奪われて殿下のしゃくやくは少々色あせて見えるのでございます。

フルヒト クラツクリ、その牡丹の花をむしってしまえ。牡丹が邪魔だ。

クラツクリ (見て) 殿下、その牡丹がこちらにやっけてまいます。さあこちらへ。

フルヒト 牡丹の花びらを散らせ。牡丹の花を切りきざめ。

クラツクリがフルヒトをひっぱって去る。ヤマシロの王子がミワを連れてやってくる。

カツラギ ヤマシロの王子、お待ちくだされ。

カツラギの王子がやってくる。

ヤマシロ どうしましたカツラギの王子。

カツラギ 殿下、どうして起たれない。どうしてあなた御自身大王になろうとなさらない。ハヤ一族があなたのかわりに女王を立て、邸を造り、倉を作り、王家のような墓さえも作っている。クラツクリなどという男の言いなりになる、大王も大王だ。

ヤマシロ これ、大王はそなたたち兄弟の母上ではないか。自分の母をそのように言うものではない。カツラギ 実の母なればこそ悲しみが憎しみに変わります。ヤマシロの王子起たれてくださいませ。

それとも殿下は、御自分が可愛くなられたのですか。危険をおかさず、王子として、安楽な生涯を送りたいと思われるようになったのですか。

ミワ なにをおっしゃるか。わがヤマシロの王子は、そのような卑怯なお方ではない。

ヤマシロ お前は黙っておれ。カツラギの王子、それならお聞きするが、どうしてそなたが起たれない。どうしてハヤ一族をそなたが討たない。どうしてそなたが大王になれない。そなたたち兄弟は先王の御子ではないか。そなたは大王が腹をいためた長子。あなたが起たればお力添えはしよう。

カツラギ いや、私はまだ若輩。とても国をおさめる器量など持ちあわせておりませぬ。ハヤ一族を倒すにはこの国の豪族の力の一つに集めねばなりません。この国の豪族たちは殿が王位につくの、十五年の長きにわたって待ちわびております。

ヤマシロ 十五年前にそなたがそう言ってくれたら、わしは起ったかもしれん。

カツラギ 十五年前はしかし私は七つの鼻たれ小僧でございました。しかしその当時から殿下の徳の深さは民百姓までが知っておりました。殿下、この国の民百姓のために起たれてください。

ヤマシロ そのように一図に思えるそなたがうらやましい。……今私が起ったとしよう。そなたの言うようにハヤ一族の圧制に怒りをおぼえる各地の豪族たちがともに起ち上がってくれるかもしれぬ。ともに闘ってくれるかもしれぬ。そしてわれらが勝つかもしれぬ。

カツラギ かならずわれらが勝ちます。

ヤマシロ そう勝てるかもしれぬ。しかしカツラギの王子、戦さをすれば、大勢の者が死ぬ。田畑は荒れる。百姓たちには使役と徴が増え、民の苦しみは増す。民のための戦さというが、その前に民が傷つき、民が苦しむのだ。

カツラギ　しかし誰かがやらねばなりません。殿下の父上が、わが国の統一という大事業に手をつけられた。殿下はその事業を完成させるためにこの世にお生まれになったのです。

ヤマシロ　いや、父はある日、都のはずれで、ボロを身にまとった乞食に出会った。父はその時、自らの衣服をぬいで、乞食に与えたという。その時父が慈悲ぶかい王子を演じていたのだろうか。そうではあるまい。父が大陸から真に学んだものは、国の政のあり方ではない。父はカラ人たちから、仏の心を学んでしまった。仏の心は、政をする助けにはならぬ、いや邪魔になる。あの乞食に衣服を与えた時から父は大王になることに背を向けたのだ。

カツラギ　（突然）誰だ！　そこにいるのは。

沈黙

カツラギ　その柱の陰にひそんでいるのは誰だ。

カツラギ刀を抜く。

カツラギ　さあ出てこい。人の話を盗み聞く下郎、顔をみせい。

カマコ、おずおず、愛想笑いをしながら出る。

カマコ 私でございます。

カツラギ カマコか。よし覚悟はできているな。

カマコ お助けくださいませ。何も私、盗み聞きなぞいたしません。はい。柱のかげで、ちょっと居眠りをいたしていたのでございます。

カツラギ 嘘をつけ！ お前はわしたち三人を謀叛の心ありとハヤのクラツクリに訴え出て、わが身の栄達を策すのであらう。

カマコ いえ、そのような大それたことを。お助けください。

カマコ床をはいずりまわる。

ヤマシロ 待たれい。カツラギ、待たぬか。

カツラギ 殿下、この者を生かしておいては殿下にも類が及びます。殺生を見るに忍びないとおっしゃるなら、どうぞお行きください。

ヤマシロ なあカマコとやら。今そなたが耳にしたわれらが話、誰にも言わぬな。そうだな。

カマコ はい、ハヤ一族をほろぼして、新たな政をなそうなどというお話、口がさけても申しません。カツラギ やはり聞いていたのではないか。さあお前の口をふさいでやる。

カマコ いえ、決して申しません。誓って申しません。

カツラギ 今は命がおしくて何とでも言おう。しかし、この刀の見えぬ処では、わが身の栄達が欲し

くなるものだ。

刀をふりあげた時、ヤマシロ「待て」と二人の間に入る。

ヤマシロ この者の命を取るなら、その前にこの私を切るがよい。さあ、カマコ殿とやら、行きなされ。カツラギの王子、これだけは覚えておいたほうがいい。世によき王とよからぬ王がいる。しかし、よき王とよからぬ王を決めるのはその王の徳や性格ではない。どのようにしてその王が王になったか、その道すじが決める。いいな。

ヤマシロ、ミワを連れて立ち去る。

カツラギ 王になる道すじがその王の何たるかを定める。……俺の母タカラベはハヤ一族の力によって大王となった。だから母の心がいかにあろうとも、大王のなすことは、ハヤ一族の思惑を決して越えることがない。……俺はどうすればよい。俺と手を組んでもに戦ってくれる者はこの世にはいない……母はクラツクリに心売り、やっと十八になったばかりの弟のオオアマと女が一人……誰も、誰もおらぬか！

ひよこたんひよこたんとカマコが帰って来た。